

## 4. 夏休みの約束

各務原市立川島小学校

6年 岩附 美穂

吉川 奈穂

尾関 萌帆

柴山 優季



敦賀市立松原小学校

6年 松嶋 杏実

どこがどのようにと言われると、すぐには答えられないのだけれど、私たちは確かに変わった。この夏の大冒険で……。

私たちは六年四組の仲良しメンバー。お互い何でも言い合える。誰にも内緒なのだが、私たちはいつも集まる公園でハッピーという犬を飼っている。

夏休みまであと十日ほどという蒸し暑い日、塾の帰りにみんなでハッピーにえさをやりながら、今日のテストの答えや英語のスペルを確認していた。そのうち話はだんだん日ごろの不満話になっていった。

「大人はいつもお金を自由に使って、好きな物を買えていいよね」

「そうそう」

みんなが口をそろえて言う。

「夏休みにさ、カードゲームの大会があるからカードをそろえたいと思って、母さんに頼んでみたんだ。そしたら『あたし～、忙しいから～、買いに連れて行ってあげられないの～』ってアイス食べながら言うんだよ。ずるいよな」

「ぼくだってそうだよ」

なおきが力を込めて言った。

「ぼくは新しいバットがほしいんだ。お願いしたら、『だめだめ、まだ十分使えるじゃない。それでがまんしなさい』だってさ。自分は新しい洋服を買ったっていうのにさ。それっておかしいと思わない？」

「そうだよ。大人って自分勝手だよねっ」

「そうそう！」

ワンワン！

とつぜんハッピーが鳴いた。いつもと違う鳴き声に、私たちはハッとした。

「どうした、ハッピー。けがでもしたのか」

ハッピーは草むらの中を無心に掘っている。そして、泥だらけの鼻先をつき出して、私たちに紙切れのような物をさし出した。

「なんだ……これ？ いやに古いな」

「……地図？ ……じゃないな」

「何か書いてあるよ。読みづらいけど」

「ほんとだ。ほら、ここ……宝？」

かすかだけれどそんな字が見えるようだ。

「なにに？ 『……宝を手に入れたくば、織田信長にゆかりのある場所へ行け。二つの品が自然と手に入るであろう。それこそが宝を手に入れる第一歩なり。それをたずさえて越前にある永平寺へ来られたし。そこで……』 ああ、肝心な所から読めないし」

「なんかこれさあ、宝のかくし場所が書いてあるんじゃない？」

「……もしかして……お金！？」

「埋蔵金とか？ もし本当なら、いくらぐらいなんだろう？」

「カードなんて店ごと買えたりして」

「私もケータイ、ほしかったんだあ」

「私はお洋服！」

ついつい私まで口走ってしまった。

私たちはひそかに計画を立てた。夏休みに入った最初の土曜日、みんなで信長にゆかりのある場所へ行ってみようと。そう決まると毎日が楽しくて、不満いっばいの自分じゃなくなっていた。

（私はみんながびっくりするようなお金持ちになるのよ！）

みんなもきっと同じ気持ちだろう。だってお金さえあれば幸せになれると信じているのだから……。

待ちに待った土曜日。からっと晴れた空に蝉の声が高らかに聞こえる。

歴史にくわしいなおきが言った。

「織田信長にゆかりのある所っていったら、やっぱり『岐阜城』でしょ。最近、信長の屋敷跡が発見されたといっって発掘されているんだよ。君たち、岐阜に住んでいるならそれくらい知っておいてほしいなあ。信長といえば……」

そんななおきの話を私たちはがまんして聞き、ようやく行き先が決定した。

険しい金華山の頂上に岐阜城は建っている。だからこそ、敵に攻められにくいのかと、改めて昔の人々の知恵に感心してしまう。

やっとお城の入り口までたどり着いた。登っている時、なおきとだいきが私たち女子の荷物を持ってくれた。きれいな虫も追い払ってくれた。二人の意外なやさしい一面を見た感じでちょっとうれしい。

「お探し物は……これ……かね」

その声におどろいてふり返ると、しらがのおじいさんがベンチに腰をかけてにっこり笑っていた。白いひげが地面に付くほど長い。差し出した手には何か持っている。

「あのお……、ぼくたち……」

「いやいやいや。なんにも言わなくても、わしゃ分かっておる。君たちが来るのをずーっと待っておったのじゃ。二つの品は、ほれ、この通り」

それは木札のような物だ。もう一つは黒い布。

「おじいさん、これは？」

「札は織田信長の『楽市楽座』のおふれの札だ。むろん本物では無いがな。もう一つは、

鵜匠が頭にかぶる烏帽子というものじゃ。岐阜の長良川鵜飼は、千三百年の歴史をもっているから。ほっほっほ……」

笑い声を残しておじいさんは立ち去っていった。もちろん、二つの品をだいきに渡して……。

「越前って、今の福井県だよなあ」

「永平寺って、有名な禅宗のお寺らしいよ」

福井に向かうこの旅で、私たちは大金を手にするつもりでいる。それぞれが親に、（私たちがいなくなると驚くな！）

そんな気持ちを込めて書き置きを残してきた。★

福井県・永平寺まではとにかく遠かった。電車やバスに何度乗りかえただろう。ひとまずそれはおいといて、私たち四人は、永平寺へとやってきたのだった。

「でもさあ、この寺と二つの品とやらが、何の関係があるのかな？」

えみかが不満そうに言う。確かにそうだ。私たちはお金のことで頭がいっぱいで、何も調べてこなかったのだから。

「まあいいじゃん。そのうち何か分かるって」

だいきがみんなをなだめる。

「うん。そうだよね」

だんだんみんなが元気を取り戻してきた。

「んじゃいくか！」

だいきが一步足をふみ入れた時だった。

「何をしている」

とても大きな声だった。私たちは同時にびくっとした。

「全くお寺の前でなんじゃ。近頃の子どもたちは……」

ぷりぷり怒っている通りすがりのおじさんに、私たちはあぜんとした。初対面でなぜそこまで言われなくてはいけないのかと思った。近所の雷じいさんよりひどいかも知らない。私たちはもう泣きたい気分になっていた。ここから遠くはなれた岐阜県からはるばるやってきたのに、どうしてこんな事になったのだろう。

（こんな事になるならお金なんて……）

そう思った私たち四人は、二つの品を永平寺のお庭の前へと持っていき、来る時通ってきた近くの丘へと急いで逃げたのだった。走っていく途中、

「待てーっ」

と追いかけてくる声があったけど、

（待てと言われて待つものはいない、それくらい今時の小学生は知ってるよーん）

と心の中であっかんべーをして、さらにスピードを上げ、私たちは逃げた。

「ふう……ひい……まゆみ、あんた速すぎ」

丘につくと、えみかはへたへたとすわりこんでしまった。私は走るのが得意である。だから、今あれだけ走っても息切れさえしていない。

「ん……？ この音は！」

耳のよいなおきが何かの音をキャッチしたらしい。なおきは、その音のする方へと走っていく。続いて私たちも走る。

「えー。まだ走るの」

えみかは半泣きだ。

「ここだ！」

やっとついた場所には、一つの立て札が立っていた。

“泉の丘”

その名の通り、札の向こうに川の水がいっぱい流れ、その先に滝が見える。

「やった！ 水だー」

だいきが川に手を入れ、水をすくいあげたその時だった。だいきのポケットから、公園で拾った紙が川にぼちゃん……。

「あーっ！」

四人の大合唱。

「あんたっ！ 何やってんのよ！」

疲れのとれたえみかがだいきの背中を思いっきりたたく。

「うわーびしょびしょ……」

なおきが川から紙を拾い上げて言う。

「こんなんじゃ、読めな……ん？」

読めないといいかけて、言うのをやめたなおきの方を私たちはふりかえった。

「す……すげえ」

「え？ 何が？」

なおきがあんまりおどろいているので、私はその紙をなおきから取り上げ、まじまじと見てみた。そうしたら、何と！ 紙のどろで読めなかった部分が、どろがきれいに落ちて、読めるようになっていたのだ！

「水にぬれたせいで、どろが落ちたんだね」

なおきが解説。

「あんたっ！ やったじゃん！」

またも思いっきり、えみかがだいきの背中をたたく。どっちにしろ、たたかれるだいきであった。

「だいき、かわいそう」

なおきがそっとつぶやいた。同感。

「ねえ、その紙の文の続き、読んでみようよ！」

そう言って私たちは、きん張しながら文を読んだ。

「『そこで、二つの品を寺の者へ預けたし』って事は……あのめちゃくちゃな行動は、あってたって事？」

えみかが、信じられないという顔をして叫んでいる。

「もう、続き読むよ～」

なおきがうんざりしている。

『そして“泉の丘”来られたし』

「それって、ここじゃん。すごいよ、ミラクル！」

えみかの叫びは止まらない。

「いいかげんにしなよ」

なおきがキレはじめているので、言うことを聞いた方がいい。

「いい？ 続きは……」

なおきが続きを読み上げて私たちはあぜんとした。

「なーんだ」

「お金じゃなかった……」

「でも、何か大冒険って感じで楽しかったよね」

「うん、うん。結果はどうあれ、よかったんじゃない？」

「だよーね」

「楽しかったな」

宝はお金じゃなかったけど、私たちは満足していた。

えっ？ 宝は何だったって？ それはねえー。

「ねえ、あそこ行ってみよう」

えみかの提案で、ちょっとこわれかけている階段を私たちは上っていった。てっぺんにつくと、

「うわあ」

「すごいキレイ」

みんなは息をのんだ。それはオレンジ色の空にある、すいこまれそうな夕焼けだった。

「来てよかったね」

「うん、よかった」

みんな口々に言う。

……宝は、『己がたどりつくまでの時間』と『友と深まった友情』だったんだ。だから、私たちは来てよかったと思う。だって、この大冒険で私たちはお金より大事な物を得た気がしたから。

それから私たちは電車で帰った。親に二時間ものお説教をくらったのは言うまでもない。

そして私たちは『かわしま燦々夏まつり』で会うことを約束した。もちろんハッピーを連れて。そしてお祭りの当日。

「おーい！ こっちだよー」

私たちはお祭りへとやってきた。ハッピーは久しぶりのお出かけに、とてもうれしそうだ。私たち四人は、あれから少し変わった。ちょっと（ほんのちょっとだけ）大人の気持ちも分かるようになった。

「ワンワン！」

ハッピーが鳴いた。あの紙を見つけた時と同じ鳴き声だった。

「え？ ハッピーどこへ行くの」

ハッピーはいきなり走り出した。私たち四人は追いかける。

「うわあ……ホタルだ！」

ハッピーが私たちに見せてくれたのは、ホタルの群れだった。

「キレイだね」

「うん」

私たちはきっと一生忘れないだろう。オレンジ色の夕焼けも、この輝いているホタルも。だから大人になったら、またいっしょにみんなであの大冒険をしよう。このホタルを見よう。

そう、私たちは約束したのだった。